

佐良浜の祭祀記録「ノート」 —福里さんの「ノート」全10冊について

上原 孝三（宮古島市史編さん委員会委員）

1、はじめに一記録することの意義

宮古各地には伝統的な祭祀が行われている村落もあれば、行っていない村落もある。祭祀が絶えた村落の一つに伊良部島の佐良浜がある。1766年に池間島から分村して佐良浜が成立した。佐良浜は行政上、池間添と前里添に二分される。池間島の池間と前里出身者を中心にして成立したのがそれぞれの集落である。池間添と前里添は隣接しているので、他所から来た者には、二つの集落の境界線がわからない。

祭祀を実施する上では、モトムラ（本村）とナカムラ（仲村）に分かれる。池間添と前里添に相当する。モトムラ（本村）とナカムラ（仲村）には祭祀を実施する神役がそれぞれいる。本村・仲村の各神役の名称・職能・人数などは概略すると下記の通りである。

【チカサ】 チカサ [tsikasa]（司）。フヂカサ（大司）、フンマ（大母）ともいう。

通称はフンマである。村落祭祀を行う上での最高神女。各1人。

【カカラ】 カラカ [kakara]（懸から）。カンカカラ（神懸から）、カカランマ（懸かる母）

ともいう。通称は、カカラである。祭祀中に神懸かり、カンガカイヌアグ（神懸かりのアグ）を謡うこともある。各1人。

【ナカチカサ】 ナカチカサ [nakatsikasa]（中司）。ナカンマ（中母）ともいう。チ

カサやカカラの補助を行う。通称は、ナカンマである。各1人。

村落祭祀を実施する上で、上記の神役は重要な働きをする。佐良浜では年間約50を数える村落祭祀を担うのは、肉体的・精神的に負担を負う。佐良浜の神役たちは神事に従事・専念するために職場（仕事）を辞めることもある。

福里さんは数年にわたり本村のカカラを務めてきた。その際、祭祀に歌われるオヨシやアグ、祭祀を実施する月日を記録してきた。それは、ノート10冊の分量に及ぶ。佐良浜には福里さんだけではなく、代々の神役や福里さんと同じ時期に神役をこなしてきた人も「ノート」をそれぞれ有している。この現象は佐良浜のみならず、宮古全域に見られる。また、沖縄諸島や八重山諸島にもみられる。

つまり、祭祀に関わる儀礼内容や歌謡を記録することは、いたるところにみられ、佐良浜特有の現象ではないのである。沖縄・宮古・八重山各地で、口頭伝承が文字として残された、ということである。

宮古では、書かれた神役のノートは本人が生存していても死後も家に残される。神事のことを記したノートには神霊が宿ると観念され、家人も他人も手を触れたがらない。かといって、本人の死後燃やされることもなく、捨てることもできない。家人は一種厄介な問題を抱えることになる。だが、「ノート」はいつの間にかなくなってしまうのが一般的である。

佐渡山安公さんと上原は、2020年3月に福里さんの家にお邪魔し、話を伺うと同時に「オヨシ」を何首か聴かせていただいた。福里さんは神役カカラに選出された際、前任のカカラ（カカラアニと称する）の家許を訪ね、カカラの「ノート」を借用し、家に持ち帰り筆写したという。筆写後、カカラアニの家に行きカカラアニの指導で「オヨシ」などを謡い習った。

その方法は、カカラアニ（カカラ姉）は自分のノートを見て、新任のカカラ福里さんは自分のノートの文字を見て、謡い方を学んだ。家でも毎日のように個人で練習した、という。「オヨシ」の詞章が長く、なかなか覚えられないので、不安感、諦め、恨みの感情が福里さんを支配した。毎日のように泣きながら謡い覚えた、と言う（この話を聞いた時には、驚愕とともに一種の爽快感すら覚えた。福里さんと同時代に生きた人々は、価値観・考え方、感情のあり方において、現在の私達とは違うように思われる。どちらが精神的に豊かであるかを考えさせられる一人の女性の生き方でもある）。佐良浜の歴代の神役たちは、皆そのような苦勞をしたであろう。

祭祀を記録した「ノート」の持つ意味は何か。個人所有の「ノート」は、もちろん本人自身のものであり、福里さん自身が筆写した「ノート」は彼女自身の役に立った。そこに記録する意義があった。だが、その内容は公的な様相を帯びている。言ってみれば、その村落の歴史の一端を担っている。また、人の一生の中で「神役従事期間」は、その人の特別な個人史の一面に外ならない。神役を引き受けることは、その村落に貢献することは確かな事実である。自分の為に記した「ノート」が、時代の経過とともに、結果として個人の思料を超えて貴重なそれとなった。

現在佐良浜は祭祀が途絶え、復活する見込みがない。祭祀の担い手が登場しないのだ。とすれば、祭祀や祭祀歌謡や祭祀の日時を記した「ノート」は貴重なそれとなる。

例えば、文学の立場からすると、佐良浜のアーグは様々な書物に文字化・公表化されたが、「オヨシ」はこれまで文字資料として活字化されず、非公開化とされてきた。数人の研究者が、「オヨシ」をCDに録音したが、それは何人かが知っているだけである。

そもそも「オヨシ」は佐良浜の祭祀歌謡の中核をなすものである。佐良浜の元島の池間島にも「オヨシ」に似た歌謡があるが、それは「オヨシ」とはいわない。「オヨシ」は佐良浜で独特に発達した歌謡であり、佐良浜の無形文化財と称すべきものである。「オヨシ」は佐良浜だけではなく、宮古の財産でもある。しかも沖縄の他の地域にはみられない貴重な歌なのである。それが「ノート」に文字として残されている。社会の中で共有する価値は十分にあるのである。

従って、その村の歴史や民俗事象や社会に興味を持っている者にとっては、「ノート」は貴重な証言であり、何もせずに捨て置くには忍びないものがある。だが所詮、他人の所有物なのである。その上、「ノート」を活字化し公表するには微妙で複雑な問題が絡んでくる。諦めるしかないのだろうか。「ノート」を活字化し公表するかどうかは今後の大きな課題である。

だがしかし、福里さんの「ノート」全10冊は、佐良浜の人々だけでなく、文学（古代文学・歌謡学）、民俗学、音楽学、映像民俗学など様々な学問諸分野に役立つ貴重な文献になることは確かなことである。

2、福里さんの「ノート」の内容について

- 1、 福里さんの「ノート」全10冊は、2019年7月に佐渡山安公さんより、USBの形式で提供されたものである。
- 2、 10冊の「ノート」は全てA4サイズの25行である。「ノート」の表紙の色は黄色であり、表紙には「CAMBRIDGE」と印刷されてある。表紙には横書きでノートの内容を書き記してある。例えば、1冊目には「アヤグ帳」、3冊目には「マビトダミカラ／ウホユークイ／ナナムイマ（デ）」とある。表紙以外は、縦書きである。
- 3、 表記は基本的にカタカナであり、まれに「生徒」などの漢字表記があるほか、ひらがな表記も見える。
内容を記した字体は、最低2種類あり、一人は福里さんであるが、他の字体は不明である。内容は意味上、基本的に分ち書きがなされ、工夫されている。
- 4、 「ノート」の総ページ数は、724ページであり、膨大な分量である。5冊目のノートは「ヒドリ帳」であり、祭祀の実施予定日を記したものである。残りの9冊は、オヨシやアークを記している。

<ノートの 表書き>

- ・ 1冊目 アヤグ帳
本村 カカラ
- ・ 2冊目 オヨセ帳
本村 カカラ
ノート右側 ウホユークイ テンガナス カラ タウチヨウカラヌ オヨシ
- ・ 3冊目 オヨシ帳
モトムラ カカラ
平成10年
ノート右側 ウホユークイヌ オヨセ
ナナムイ マ（デ）
ノート左側 マビトダミカラ ウホユークイ ナナムイマデ
- ・ 4冊目以降、省略。

<ノートの実際の内容> *（ ）の数字は、オヨシの内容のかたまりという意味。

- ・ 1冊目 表紙には、「アヤグ帳／本村 カカラ」とある。
1枚目の「INDEX」に
「ウタヲナラウ時ニワ」とあり、以下の通りである。
 - ① ゴデンポー
 - ② ヨツダケアーク

- ③ ジュリホーカ
- ④ マツガマアヤグ
- ⑤ ハイユヌカナス
- ⑥ ンナママツタニ
- ⑦ カンナヤギのウタ

2枚目 生徒ネガイのこと (1枚)

- 歌謡1 ゴデンポー 6節 (1枚)
- 歌謡2 カンナヤギのウタ 31節 (5枚)
- 歌謡3 ハイユヌカナス 12節 (1枚)「正月ニ道カラウタウ」
- 歌謡4 ンナママツタニ 23節 (2枚)「正月ニ道カラウタウ」
- 歌謡5 家の落成のウタ 7節 (1枚)
- 歌謡6 子供の祝歌 ゴデンポー 12節 (1枚)
- 歌謡7 カイマタヌ ユスマヌシユウ 12節 (2枚)
- 歌謡8 マツノウイヌ ウタ 26節 (4枚) ナナムイデワ スワッテ
ウタウ
- 歌謡9 クライアガイヌ ウタ 12節 (1枚) ナナムイニワ ウタワナイ
- 歌謡10 カリュシャ ミトミヌ ウタ 25節 (3枚)
- 歌謡11 アトノウイヌウタ 8節 (1枚)
ゴデンポーカラウタウ
- 歌謡12 ヒヤーズ ラクセイ イワイヌ ウタ 8節 (1枚)
- 歌謡13 題名なし (ゴデンポー) 7節 (1枚)
- 歌謡14 アマガイヌウタ 19節 (2枚)
- 歌謡15 アマガイヌ クイチヤ 6節 (1枚) *節番号なし
- 歌謡16 サンバシニガイヌ クイチヤー アヤグ 13節 (3枚)
- 歌謡17 ナカヤマブナリヌ ウタ 15節 (2枚)
- 歌謡18 アグヌス ドスヌス クライアガイヌ ウタ 8節 (1枚)
- 歌謡19 ユツダキオドリヌウタ 36節 (5枚)
- 歌謡20 ジユウリ ホーカ オドリヌ ウタ 36節 (5枚)
- 歌謡21 マツガマ オドリヌ ウタ 36節 (4枚)
- 歌謡22 ユウクイヌ アマイシヤ かたまり・5 (7枚)
- 歌謡23 マイバイヌ マパイナス ミガガマ
ミヤークズツヌ ウタ 16節 (2枚)
- 歌謡24 ミヤークズツヌ カンナヤギ アヤグ 34節 (7枚)
- 歌謡25 アガイジヤト ンナカ 18節 (2枚)
- 歌謡 明治一大正時代の校歌 4節 (1枚)

- ・ 2冊目 表紙には「オヨセ帳／ ウホユークイ テンガナス カラ／ タウチヨウカラヌ オヨシ／ 本村 カカラ」とある。

歌謡 1 ユークイニ ウタウ タウチヨウヌ オヨシ 節番号なし (3枚)

歌謡 2 ユークイヌ アマイシヤ (2) 節番号なし (9枚)

歌謡 3 ウホユークイヌ クイチャー 節番号なし (2枚)

歌謡 4 マキニガイヌ オヨシ 節番号なし (5枚)

ヒヤーズヌ ファガン (1) 節番号なし (5枚)

ヒヤーズヌ シマガン (1) 節番号なし (8枚)

歌謡 5 ウホンマニガイ

ナイカニガウチャウヌス 節番号なし (5枚)

ヒヤーズヌ ファガン (1) 節番号なし (5枚)

歌謡 6 ユークイニ ナナムイニ ウタウ オヨシ (1) 節番号なし (9枚)

- ・ 3冊目 表紙には、「オヨシ帳 ウホユークイ /モトムラ カカラ」とあり、ノート右側に「ウホユークイヌ オヨシ/ナナムイ マ(デ)」とある。ノート左側には「マビトダミ カラ/ウホユークイ/ナナムイ マデ」とある。

歌謡「イディフチ」 12首(実際は13首)

① テンガナスヌ イデフツ 10行

② クガニンマヌ イデフツ 7行

③ ナナムイヌ イデフツ 18行

④ シヌツニイヌ イデフツ 18行

⑤ ナイカニガウチャウヌス イデフツ 6行

⑥ ウイラニイヌ イデフツ 3行 (テンガナスと同じチョーシ)

⑦ ナツヴァニイヌ イデフツ 10行

⑧ ヒヤーズヌ ッファガンヌ イデフツ 4行

⑨ ヒヤーズヌ シマガンヌ イデフツ 4行

⑩ シマヌハヌ ユーヌヌス イデフツ 7行 (長山カズマヌ オヨシとチヨウーシワ同じ)

⑪ 男 マウカン (イデフツ) 18行

⑪ 女 マウカン (イデフツ) 16行

*「マウカン」は、男と女のそれをまとめて1フダイと意識(認識)している。

*「マウカン」は、ムジイヌビューイとイモビューイとウフンマニガイに謡う

*ムジイヌビューイ 11フダイ

*ウフンマニガイ 11フダイ

*イモビューイ 12フダイ (11フダイ+ウンヌヌス イデフツ)

⑫ ウンヌヌス イデフツ 16行

「インギョウニウタウ オヨシ」 (フヂイカサとカカラ) 2首

① フヂイカサ 4行

② カカラ 4行

「マビトダミ ニガイヌ オヨシ」

① テンガナス (12) ノート8枚

② クガニンマ (12) ノート8枚

③ ナナムイ (12) ノート8枚

④ ンヌチニー (12) ノート9枚

「井戸ニガイ」本村がヒトフダイ

① カーヌカンニガイヌ オヨシ (12) ノート7枚

「浜ニガイ」 *2月 11月

① 浜ニガイヌ オヨシ ハドラ (3) ノート17枚

② 浜ニガイヌ オヨシ ヨシロ (16) ノート5枚

「生徒ニガイ」 *3月

① テンガナス (無記入) ノート9枚

② クガニンマとあるが、詞章なし

③ ナナムイとあるが、詞章なし

④ 小学校 タウチヨウヌオヨシ (無記入) ノート7枚

⑤ 中学校 タウチヨウヌオヨシ 詞章なし

⑥ カイマタヌ ヌスマヌ シュウ

「サンバシニガイ」本村カカラ ヒトフダイ

① サンバシニガイヌ オヨシ ノート7枚

「長山カズマニガイ」本村カカラ ヒトフダイ

① 長山カズマニガイヌ オヨシ ノート7枚

「ムズビュイ ウサギ」 11フダイ

① ムズビュイ ウサギヌ オヨシ ノート9枚

② ナイカニガチャウヌス オヨシ ノート6枚

「ウホンマ ニガイ」8月 11フダイ

- ① ウホンマ ニガイヌ オヨシ ノート7枚
- ② オホジャラス ウタ ノート4枚
- ③ 中ジャラス ウタ ノート5枚

「ユークイ」 *9月 テンガナス クガニンマ ナナムイ ンヌツニイ 4フダイ

- ① ユークイニ ナナムイニ ウタウ オヨシ ノート9枚分量

* 4冊目以降、省略。

<オヨシ>について

佐良浜の祭祀歌謡の中核をなすのは、神役カカラが謡う「オヨシ」である。「オヨシ」は「オヨセ」とも発音されるが、「ウヨセ」とか「ウユシ」とは発音されない。「オヨシ」は、様々な祭祀で謡われるが、全部で12首と意識されている。1つのオヨセを「イチフダイ」と称している。「3フダイ」・「4フダイ」・「11フダイ」・「12フダイ」と称し、各祭祀で定められたフダイが謡われる。フダイには冒頭に歌われる「イディフチィ」（出口、出だし）と称される序歌の機能を果たすものと本体（本歌）がある。

「イディフチィ」（出だし）には、以下の11の名称のそれがある。

- 1、テンガナシィ
- 2、クガニンマ
- 3、ナナムイ
- 4、ンヌチィニイ
- 5、ナイカニガ ウチャウ ヌシィ
- 6、ウイラニー
- 7、ナツヴァ
- 8、ヒヤーヂィヌ ッファガン
- 9、ヒヤーヂィヌ ンマガン
- 10、ンヌヌハヌ ユーヌス ヌシィ
- 11、マウカン（男マウカンと女マウカン）がある。
- 12、ウンヌヌシィ

以上を「ジューイチィ フダイ」（11フダイ）と称している。11フダイに「ウンヌヌシィ」を加え、「ジューニ フダイ」（12フダイ）という。

フダイの意味はよくわからない、とインフォーマントは言うが、「クダリ」（下り）の意ではないかと思われる。

池間・佐良浜・西原の歌謡—オヨシについて

＜佐良浜からみた池間の歌謡＞

佐良浜では、オヨシいう。しかし、池間ではオヨシとはいわない。佐良浜でいうオヨシの元となったものはある。それは池間から習得したものであった。池間から習得したが、メロディーは似ている。これは、佐良浜の人が池間に行って、直接祭祀を行ったせいであろう。

池間	佐良浜	西原
やぐみていだ	ていんがなしい	なし
んまていだ	くがにんま	なし
ななむい	ななむい	なし
ないかに	ないかにがうちやうぬしい	なし
ばかぼう (5首)	んぬちいにー	なし
※上原が採集したものが	ういらにー	なし
5首だけ。	なつうあ	なし
	ひゃーじいぬつふあがん	なし
	ひゃーじいぬんまがん	なし
	んまぬはぬゆーぬぬしい	なし
	まうかん	なし
	うんぬぬしい (12首)	なし

西原にオヨシがない理由は以下の通りだと思われる。

西原には、池間にあるような「マジヤムトゥ」「アギマスィムトゥ」「マイヌヤームト」「マイザトゥムトゥ」といった元はない。これは分村の際、次男・三男が主だったせいであろう。このようなわけで西原には元がない。神歌（祭祀歌謡）も似ているが元島とは異なる。

祭祀歌謡としてのオヨシがないのは、おそらく分村当時祭祀集団がそのまま西原に移住しなかったからであろう。そこで、西原は西原なりに考え祭祀を行うようになった。移住してその当時、生活していくのに祭祀どころではなかった。ある程度生活が整ってから祭祀が行われたと考えられる。従って、そこにはオヨシが発生しようがなかった。

佐良浜に「オヨシ」があったのは、佐良浜の人たちが、直接池間島に行った故であろう^{注(1)}。実際に池間島に行って祭祀に参加した。ここでは、「オヨシ」を直接聞く機会もあったはずである。旋律は単純なので、覚えることも出来た。これが、佐良浜に「オヨシ」があった理由である。

池間・佐良浜に「オヨシ」があり、西原に「オヨシ」がないのは以上の理由によるものと考えられる。

注(1) 佐良浜から船に乗り、池間島に渡ったという。

※国際音声字母を「ひらがな」に直したものを用いた。